

悶亭
Modae Tei

成年
ERO JUMP

エロマンガ

オールフルカラー!

■女子高生ヒロインレイプ!レイプ!編■

成人向

皆さんこんにちわ！間亭ですー。

成年エロジャンプオールフルカラーようやく発行できました。
本当ーに長かったまぁぁー…(T▽T)

T・L・O・V・Eるの原稿って何故か本当によくトラぶるのです。
本当に本当に。友人のサークルさんにもトラぶりまくりですよ。
人気のわりに本が少ないのは、きっとそのせいだ！うん。
得るべし、T・L・O・V・Eる！

さてさて。

変な言い訳はほどほどにして。

今回は素敵なゲスト様方にイラスト&SSも寄稿して頂き
時間を掛けた分いい感じの本になったかなと思います！
いつもの陸尊エロエロ本ではありますが、皆さんに
少しでも気に入って頂けましたら幸いですー。

ではでは。

2007 4月某日 間亭紳太郎様

やっと終わったのに6日後はコミック1新刊の締め切りだよー…

ルーシー好き好きレ

SEINEN EROJUMP ALL COLOR



無限の魔力を閉じ込めてあるといわれるプラチナプレート。

伊勢はそれを偶然、校内で拾い上げた。
それを手にした伊勢が考えたことは、女の子を犯る、ただそれだけだった。
伊勢は、呼び出してのこのことやってきた愛花を魔法を使って縛り上げた。

「柊はどうしてこんなにおっぱいが大きいの？ 誰かに揉まれてるの？」

「そんなわけな……ん……」

制服越しに乳首を指でゴリゴリと弄ると、愛花の口から熱い吐息が漏れた。

「へえ、感じてるんだ。レイプされそうなのに感じてるんだ、柊」

「感じてなんか……んあう……な……なんで、なんでこんなことするの……？」

「柊がそんなエッチな身体してるからだよ」

尖った枝が次々に制服を切り裂いていく。
こぼれ落ちそうなブラジャーに包まれた胸がお目見えする。

「お願い……こんなこと、やめよ……？」

「ここまできて、やめられるわけないだろ？」

伊勢の制服の下、傘の開いた怒張は限界まで達していた。

「一気に刺してやる。いけっ！」

無数の枝が地面から生まれ、愛花を襲う。

「いやあああああ！！」

ブラジャーを剥ぎ取られ、パンティまでも破り取られる。
愛花のグラビア級の胸は、ツンと張りがよく艶やかだった。
乳房の真ん中に咲く小さな二つさくらんぼは、甘い味がしそうに見える。
他人には見せたことのない秘密の花弁は、少しだけ蕾を開いていた。

「いやっ……」

他人のペニスなど見たことがない愛花は、顔を背ける。

「つれないなあ。これから散々お世話になる肉棒なのに」

伊勢は、愛花の上半身を倒して肉棒を彼女の口元に押し当てる。
がっちりと閉じられた唇に、竿を上下させてねじ込みようとする。

「やっ！ き、汚い……やめてえ……」

「な……」

痛烈な愛花の言葉に、伊勢は言葉を失う。
そして次第に怒りが湧き上がってきた。

「その汚いオチンチン、しゃぶらせてやるよ！」

「痛い！ 痛いっ！！」

捻りあげられた腕の痛みに、涙の雫がポタポタと砂の上に落ちる。
じたばたともがいて暴れるたびに二つの肉丘が柔らかな動きを見せる。

「仕方ない。自前の魔法使うか」

伊勢は自前のカードを愛花の首筋に当てて埋め込む。

「ひっ……んっんんんんん！！？」

物を磁石化する魔法によって、
愛花は意思に反してモノを根元まで咥え込んでしまった。

「うおっ……すげえ気持ちいい」

猛った羊が、愛花の口内で暴れ、そのたびに舌や頬に触れる。
柔らかな舌触りが快感を呼び起こす。

「うんんん……んん……んぶっ……ひもひわうい……んん」

初めて味わう男の一物は、我慢汁の苦い味だった。
透明の粘液がジワジワと伊勢のペニスから吐き出され、愛花の口内を巡る。

「すげっ……あの味が、俺のチンコにむしゃぶりついて……ぐっ」

純情可憐なイメージしかない愛花が自分のチンポを咥えこんでいる。
想像だけで、射精できそうだった。
全身が痺れるような感覚に襲われ、伊勢は足腰がガクガクと震える。
め取られても、節口からはどんどんカウパーが溢れ出す。
我慢の限界が近づき始め、肉棒は白い体液を吐き出したがる。

「だ、出すぞ。精液出すからな。全部飲めよ」

「う……んんんんんんんんっ！！」

愛花の暴れ方が尋常じゃなくなった。
ペニスを咥えるのをやめようとしても、
磁力に引かれて再び根元まで咥え込む。

「そんなにされたらっ……ああっ……でるっ！！」

臨界点を超えた噴火口から白いマグマが大量に放出された。

「ぐっ……うんぶっ……うんんんんっ……げほっ……」

ドロドロの苦い液体が、愛花の喉や下や歯茎にまとわりつく。
蒸せた愛花は、精液を吐き散らして、自分の顔を白く汚していく。

「さて、前戯はこれくらいにして、本番といこうか」

若い肉棒は、一度の射精では衰えはしなかった。
みるみるうちに直立して、女の穴への挿入準備が万端になる。

「さて、準備しないとね」

伊勢は、自分のペニスを指で弾く。
すると、腫れ上がるようにペニスが巨大化し、棍棒のような形状となった。

「そんなもって、これで愛の行為を録っておかないと」

伊勢はあらかじめ持ってきていたビデオカメラの録画ボタンを押す。
そして、愛花にヒントを当てて撮影を開始する。

「始めよう。もうコレじゃないと満足できない身体にしておけるよ」

「お……お願い……こんなこと……やめようよ……？」

性善説寄りの愛花は、まだ説得で何とかできるかもしれないと考えている。
が、理性をコントロールできなくなった男に通用するわけがない。

「だー咄、終の子宮に、どびゅどびゅ精液を出すまでやめられるわけないじゃん」

「せ……せい……えき……子宮？」

「ホントはもっと愛撫するのがセオリーだけど、我慢できないし、一気にいくよ」

そう言いながら、肥大化した肉棍棒を愛花の閉じた赤貝に押し当てる。
処女で、しかも極太の肉塊がそう易々と入るわけがない。

「んんん、痛いっ！ いらないっ！ やめっ……いいいいいいいっ！」

処女膜以前に、割れ目がビリビリと裂けるグロテスクな音が響く。
伊勢は片手で巨大ペニスを支えて、一気に腰を突き上げる。

「んんんんん……！！！」

「きっ……くっ、このまま出しちゃいそう」

尋常じゃない締め付けと締めつく肉壁で、伊勢は快楽に身悶えする。
愛花の苦痛など気に留めることなく、重く太い肉棒の抽挿を始める。
鮮血で濡らされた肉棒と陰壁は、めるめるとこの上ない快感を生み出す。

「すっけえ、いやがってるくせに、きゅーきゅー締め付けてくる。淫乱マンコだなあ、俺？」

「ぐっ……んん……あうっく……んんん……」

扱い難道が無理やり広げられている愛花には、言葉は届いていないようだった。
爆発の近い伊勢の噴火口は、そんな姿を見て臨界点に近づこうとしていた。
下半身への至極の快楽に震え、重い肉棒を何度も何度も愛花の股に打ち付ける。

「で、出る、出るぞ！ 中に出すからな！ 出すからな！！」

「いっ……ぐっ……あ……いやっ……中……いやあああああ！！」

弓なりに愛花の身体がしなった瞬間、伊勢の分身の白い液体が、愛花の膣内に放出された。

「でもほんとに大丈夫なのか？ あの姦の娘だろ、こいつ」

「大丈夫ですよ。ビデオ撮っておりますから、な？」

伊勢は愛花の顔を覗き込む。
愛花は悔しそうに顔を歪める。

「つっても、もうやめようがないけどな」

「まあな。うあっ、すげえ舌使い。たまんねえ」

愛花の身体に飽きた伊勢は、彼女を上級生へプレゼントした。
親があの教師ということでビビっていた上級生も、
愛花の豊満な肉体を目の前にして理性は吹っ飛んだ。

「ほんとにガバガバだな、こいつのマンコ。もっと締め付ける、この雌豚！」

パンシ、と乾いた音が響く。

「うんんんんんんっ！」

手形がつくほどの威力に、愛花の身体が跳ね上がる。

「うおっ！ いきなり締めまりがよかったぞ…こいつMだな」

バックでズンズン突いている上級生は、
それがわかってパンパンと平手で愛花のケツを叩き始める。

「んん……ひたひい…やめえ……ああんっ！」

「まだ刺股が足りないみたいだな、これのスイッチ入れてやるよ」

そう言ってパイプをアナルから取り出して、スイッチを入れる。
パイプはウインウインとグロテスクに動き始める。
上級生はナイフを刺すように、アナルに再び一気に根元まで刺し込む。

「いざいいっ！！ うぐっ、んんん……うんんんん！！」

腸の中で暴れるパイプが、鈍い痛みを伴わせる。

「おお、まーた締めまりがよかった、この女、ド淫乱だな」

「んん……あむん……んちゅる……ぢゅばっちゅぶ……」

小波だった快楽がハリケーンのように愛花を襲い始める。
愛花の頭は、無意識に上下に動いていた。
安産型の丸く艶やかなヒップも、ペニスの挿入に合わせて上下してグラインドさせる。
自ら快楽の頂点に登りつめようとするかのように。

「すげっ…もう、やばいかも」

「せ、精液かけないでえ。んんん…みんなに、知られるやうーあっ……中に…中に出してえ！」

可愛い顔に似合わない淫乱な言葉で、上級生たちは発射の後押しをされた。

「ぐあっ！！」

口と膣に根元まで突っ込まれたペニスたちは、爆発するように子種を吐き出していく。

堕ちていく愛花を鼻で笑って一瞥し、伊勢は出て行った。
新しい玩具を探すために。



「この始末屋、中きつつきつた」

「さっきまで処女だったんだ、当たり前だろ」

媚薬とシャブの混ざった液体をアナルに注射され、
背後からヴァギナにペニスを突き立てられている猿飛あやめ。

「ひゃうう…ほんなり……かひなせないれー！」

「ははは。何言ってるのかさっぱりだ」

「もっと掻き混ぜて欲しいってよ。望みどおり、ほら！」

子宮めがけて突き立てられたペニスは、あやめの子宮口を叩く。

「はむううう！ んぐう！ んはああ！ んふう！」

「おい。締まりが強くなったぜコイツ。やばっ、出そう」


「薬が効いてるようだな。よし、淫乱女に聖水かけてやる」

アナルから垂れる液体があやめの膈内に混入し、
ペニスが突き刺さるたびにぶちゅぶちゅと音を立てる。

「処女マンコにたっぷり注いでやる！ くおっ！」

「ああああああっ！ はああああんっ！」

白濁液が一瞬であやめの膈内に充満した。
そして、頭に生暖かな黄金水がかけられる。
あやめはそのまま涎を垂れ流しながら気絶した。



「ひぁうっ！ もっとお突いてええ！」

ヴァギナを拡張され、アナルを突かれ、
あやめは至福の叫びをあげる。

「もうお前に薬は必要ないな」

「いやぁ…気持ちいい注射もっとしてえ！」

自ら腰を落とし、アナルにペニスを根元まで
埋め、飛ぶ薬を懇願するあやめ。

「よし。ただし俺を満足させてからだ」

男は腰をくねらせ、ピストンを繰り返す。
あやめの腸内で猛ったペニスが暴れる。

「ひぐぅ……出るぅ…なにか出るぅ！」

涎を吐き散らしながら、あやめは黄色い声を
上げる。

「ひぁあああああぁっ！」

ブシャーと広げられたヴァギナから黄色い液
体が飛び散った。

同時に男のペニスから白濁液が発射された。

イラスト
ストーリー

桜井チルコ
ミコト

どうもこんにちは。
こういう形で作品に携わることが初めての、
みっくすじゅ～すのミコトと桜井チルコです。

ミコト個人で別の作品を請け負った際に、
この企画まで呼んで頂きました。
本当に感謝です。

学園ラブコメをこうまで好き勝手に、
二次創作で暴れさせて頂いたことも感謝ですw

みっくすじゅ～す以外で、
ミコトと桜井チルコがタッグを組むことは、
そうなかなかないと思いますが、
またこういう機会があれば、
こうして皆さんの前に作品として
お会いしたいと思っています。

Illust 桜井チルコ

Story ミコト

「みっくすじゅ～す」

<http://mixjuice2006.sakura.ne.jp>

※イラストは現在作成中のゲームより「P69号ちゃん」



キュン



そんなに
おびえること
ないじゃねえか

ひん

俺様が
気持ちいい事
してやろう
つてのによオ。

うほオ!!
こりやすつけえ
キツキツ
マンコだな!!

チンポが
潰されそう
だぜえ!

痛痛
いいッ

イヤあッ
抜いて
抜いてエー!

地球人の
処女マンコは
やっぱ最高!

お願い……
許して……っ

初めて……
なんです

だから

へー処女ってか。
さすがにキレイな
ピンクだねエ。

んば

!





デコレーションにゃ
俺様のタネは
もったいねーが
演出は大事だからな

結城をぶち殺した
後でたつぷり
牝穴に注ぎこんで
やるから待ってろ

おらっ顔を
背けんじゃねえ!



ほら、
王子様の
到着だぜ

エロ顔しつかり
見せて
悔やませて
やりな!!!



西連:

遅かったじゃ
ねえか結城!!

END

成年エロジャンル オールフルカラー

発行：同人

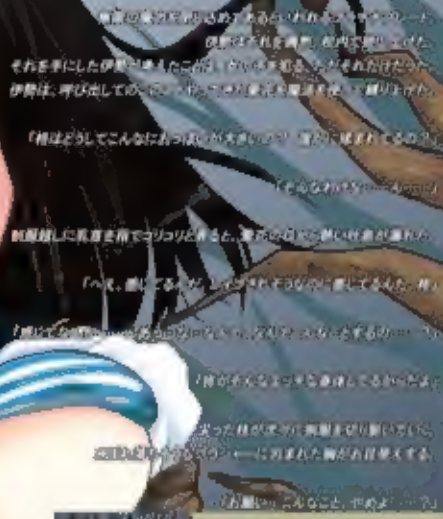
発行日：2007 4/22

<http://modaetei.sakura.ne.jp/>

無断転載・複製厳禁!



Modāe Tei



成年
ERO JUMP
エロマンガ先生
オールフルカラー!